

令和４年春の叙勲 マグノ氏への伝達式：大使挨拶

２０２２年９月３０日

皆様、ようこそ日本大使公邸にお越し下さいました。

ブラジルの独立２００周年の重要な節目を迎えたばかりのこの機会に、日伯農業協力に大きく貢献されたカルロス・マグノ・カンポス・ダ・ホーシャ氏に叙勲を伝達できることを大変光栄に思います。

令和４年春の叙勲において、マグノ氏は「旭日中綬章」を受章されました。

マグノ氏は、リオデジャネイロ州で生まれ、ミナスジェライス州ヴィソザ大学畜産学部を卒業後、現 EMBRAPA セラード研究所で勤務されました。

昭和６３年(1988年)から平成元年(1989年)にかけて、EMBRAPA セラード研究所長(CPAC 所長)として、ブラジルにおける農業の調査や最適な農業手法の確立について最前線に立ち指揮すると共に、日本、ブラジル側関係者との調整に尽力した結果、バイア州及びマット・グロッソ州におけるセラード農業の開発技術の適用、普及及び発展に成功しました。

また、平成元年(1989年)から平成２年(1990年)にかけて、EMBRAPA 総裁として、セラード農業開発研究協力の円滑な実施のため、国、州、民間機関との調整に種々の努力をされた結果、短期間での生産性向上や気象災害予測等に関する効果等の達成に寄与しました。

更に、平成８年(1996年)から平成１１年(1999年)にかけて、セラード農業開発研究協力において、持続可能かつ環境に配慮した農業技術の開発のための課題解決に真摯かつ熱心に取り組み、環境インパクトを低減した資源保全型の総合的農牧開発技術の確立を実現させました。

この実績はその後公共財として広くブラジル国内に提供され、日本とブラジルの協力関係を広く世に知らしめる礎となりました。

また、その間のみならず、実施期間 20 年を超えた日伯セラード農業開発協力事業（PRODECER）について、多くのイベントや、著書（持続可能な農業を目指す開発ーブラジルのセラード）を通じて、日本とブラジルにおける農業協力を国内外に広く認知させました。

これら貢献を称え、本日、マグノ氏に対して「旭日中綬章」を伝達させていただきます。

現在、世界ではコロナ禍、露のウクライナ侵略、欧州の記録的干ばつにより食料安全保障が心配される中、日伯セラード農業協力をきっかけに世界最大の大豆輸出国となったブラジルが、世界の食糧危機を救おうとしており、大変誇らしく思います。

また、我々は EMBRAPA を実施主体とした新たな日伯農業協力として精密・デジタル農業共創プロジェクト（Collaborative Development Project for Precision and Digital Agriculture to Strengthen the Innovation Ecosystem and the Sustainability of Brazilian Agrifood Chains）を準備しています。マグノ氏の御功績に倣い、このプロジェクトが新たな日伯農業協力の象徴的な成功案件となることを期待します。

改めて、マグノ氏の御功績に敬意を表すると共に、御家族、友人をはじめ、協力してこられた関係者の皆様に感謝するとともに、お祝い申し上げます。